

記録ラッシュに湧く岡山——銀C科目への挑戦——

竹 鼻 信 昭

最近、岡山方面のお得意先が増えて、年に1、2回岡山へ出張しています。西大寺から宇野に抜ける途中、いつも金甲山の麓の児島湖のほとりの道を通ります。この道を通る度に、あのなつかしい航空部時代の出来事が思い出されます。

今は、新しい岡山空港が開港したために岡南飛行場と名前を改めた旧岡山空港での冬の合宿は、瀬戸内海を渡って来た強い西風がまともに吹きつける寒い寒い合宿でしたが、この偏西風がランウェイの北東、約3km、児島湖の対岸にある金甲山に当たって、斜面上昇風となることを利用して銀C課目にチャレンジさせるという窪田コーチの言葉を聞いた時には、私は湧き上ってくる闘志に身体は熱く燃えていました。

その方法は、当時、通常は自動車引航による400m位の曳航索で、300m～350mで離脱するものを約倍の800mの曳航索により600m位迄高度を取り、最少沈下に速度をセットして追風に乗る、児島湖を横断して、失高100～150mで斜面上昇風帯に入るといふものです。プリーフィングでこの説明を受けた時には、「そんなに上手くゆくのかナー」と半信半疑でしたが、いざ練習が始まり西風7～8m吹き出すと、先ず窪田コーチ同乗によるトレーニングに出発、離脱後反転して、児島湖を渡ってゆく間は、どんどん高度は落ち、下に見えていた金甲山の頂上がだんだんとセリ上ってゆくは、下は一面の水面、ランウェイは後になって見えないはと少々心細い気がしたが、前夜の説明通り、山の斜面に到達する前にバリオは十を差し出し、上昇風帯は確実にありました。約30分、斜面上昇風での飛び方を教わって帰投、すぐに「竹鼻行け」とのコーチの指示で、愛機イオラスに向かって、「5時間飛んでくれよ」と心の中で語



離脱後反転して金甲山に向かう。下は児島湾
(写真提供 窪田昌三氏)

りかけながら出発し、山の木々の葉っぱのひとつひとつが手に取るように見える斜面を行きつもとどりつしながら6時間翔び続けたあの光景を……。タブの調整がどうもうまくいかずに、ギッタンバッタンしながら、それでも浮いていたのは西高東低の気圧配置のおかげでした。夕日に映える瀬戸内海の島々が美しかった。私の為に一日中ランウェイでボケッとしていた部員の皆様に感謝の一日でした。そして、航空部時代の最も思い出に残る一日でもありました。もう30数年も前の事にて詳しいことは忘れてしまいましたが、今でも私の自慢話のひとつであることにちがひありません。

これからも、グライダーの経験が何かにつけて私の支えになり、私の自慢の種になってくれることと思います。その為にも、同志社大学航空部の皆様が、今後益々活躍されんことを祈っています。

(昭和43年卒)